

詩を読む 1

とおくを、それから — 中原中也「雪が降っている」

雪が降っている・・・

中原中也 (なかはら ちゅうや)

雪が降っている、

とおくを、

雪が降っている、

とおくを、

捨てられた羊かなんぞのように

とおくを、

雪が降っている、

とおくを。

たかい空から、

とおくを、

とおくを

とおくを、

お寺の屋根にも、

それから、

お寺の森にも、

それから、
たえまもなしに。
空から、
雪が降っている、
それから、
兵営にゆく道にも、
それから、
日が暮れかかる、
それから、
喇叭（らっぱ）がきこえる。
それから、
雪が降っている
なおも。

「雪が降っている」、「とおくを」、「それから」という言葉が何回も繰り返されます。こうした言葉の繰り返しから、雪がしずかに「たえまもなく」、やむことなく降りつづいていることが伝わってきます。そして、「なおも」という終わりの言葉が、雪がまだまだ降りつづくことを表しています。

「雪が降っている とおくを」という語句は、8音と4音です。「たかい空から とおくを」は7音と4音、「たえまもなしに 空から」は7音と4音という

ように、この詩では、だいたい「8音と4音か7音と4音」というリズムが繰り返されています。日本語の短い詩である俳句と短歌では「7音と5音」がリズムの基本です。5音が4音に工夫されていますが、この詩のリズムはそうした基本にしたがっています。「それから」の連続の中に「空から」が入っているのは、ちょっとおもしろいですね。

雪は「たかい空」の「とおく」から降ってきて、「とおく」に見え、私たちの思いを「とおく」に誘います。

雪は「捨てられた羊(ひつじ)」のようです。「捨てられた羊」という言葉には、新約聖書の中の「道に迷った羊」(ルカ 15 章)のイメージがあるように思います。小さな息子が亡くなったあと、中也は教会に通ったことがありました。「捨てられた羊」という人間の悲しさが、「たえまもなく」しずかに降って、大地につもっていきます。そして、降りつもった雪は世界を白一色のうつくしきでみせます。

中也がこの詩を書いたのは1929年です。世界にも日本にも戦争の動きがせまっていました。「兵営」と兵隊が吹く「喇叭」が、このしずかな「雪」の詩の中に戦争のにおいを感じさせます。

★中原中也の詩はすべてウェブで、無料で読むことができます。

中原中也・全詩アーカイブ：<http://nakahara.air-nifty.com/>

★ 中也は雪が好きでした。中也の詩には雪が数多く登場します。

「幼年時 私の上に降る雪は 真綿（まわた）のようでありました」（「生い立ちの歌」）

「汚（よご）れちまった悲しみに

今日も小雪（こゆき）の降りかかる」（「汚れちまった悲しみに」）

「雪が降るとこのわたしには、人生が、

かなしくもうつくしいものに——

憂愁（ゆうしゅう）にみちたものに、思えるのであった」（「雪の賦（ふ）」）

中也はフランスの天才詩人アルチュール・ランボアの詩を愛していました。ランボアは20歳で詩を捨て、37歳で亡くなりました。中也は1937年、30歳でこの世を去りました。

(1189字)

(2020.4 Written by Masami KADOKURA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.